撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

木津川水門

大阪府大阪市大正区

大阪湾の最奥部に位置する大阪港。水深が浅く高潮の影響を受けやすい地形を有するこの港に「三大水門」と呼ばれる水門がある。安治川水門、木津川水門、尻無川水門は、国内でもここでしかお目にかかれない鋼製のアーチ型水門だ。完成は一九七〇年。約三八万五、〇〇〇戸が浸水被害を受けた一九六一年の第二室戸台風を契機として整備され、「水都大阪」を現役で守り続けている。

普段は川を跨ぐように約三〇㍍近く垂直に立ち上がっており、洪水や高潮の危険が迫った時に巻上げ機を使ってこの重量五三〇㌧の主水門アーチを上流側に倒し川を閉鎖、海水の流入を抑える。

今回、木津川水門の試運転に立ち会うことができた。径間は五七㍍、右岸側に一二・五㍍のスイング式ゲートの副水門を擁する。警報の発報と同時にジワリと巨大な鋼構造物が傾き始める。一呼吸おいて副水門のゲートも閉じられる。主水門は三〇分、副水門が一〇分、その他の操作も含め五〇分ほどで川がせき止められた。二〇一八年に上陸した台風二一号の際には閉門により損害額一七兆円とも試算された被害から街を守った。

「普段はこの巨大なアーチが何のためにあるのか、関心の薄かった府民の意識が近年、自然災害の甚大化によって急速に高まっています」と大阪府西大阪治水事務所の浪石（なみいし）朋治主査が話す。この水門が年中閉門するようなことがないよう願っているが、と笑った。

半世紀を超えて大阪の街を守り続けた鋼鉄製の巨大な盾。現在、三大水門の更新計画が進んでいる。役割を終えようとしている水門の雄姿を目に焼き付けた。

2018年に閉門した際の映像をWebで見ることができる。20秒ほどの動画だが水門に隔てられた上流と下流の水位差は3mを超えているように見える。整備された当時は津波被害に対する意識は希薄だった。東日本大震災を機にこの津波対策が視野に入る。水門は今後約20年の歳月をかけて生まれ変わることになる。